

ひよつとご乱舞 番外リーディング

# まだ、わかんないの。

作・広田淳 | 2011.6.30

出演

カズヤ  
内藤  
ミヤコ

この戯曲は3月11日の東北・関東大震災後に書かれた。まずは被災された方々へ哀悼の意を表したい。

震災後に何がどう変わったのか？ あるいは何が変わらなかったのか？ そのことを正確に把握することはまだ難しい。言えることがあるとすれば、ほとんどの日本人が震災後の風景をある種、共通の原風景の1つとして記憶したということ、そのへらひだろう。

多くの演劇人もまた地震・津波・原発災害によって被災した。劇場を失い、あるいは劇団員を失うという強烈な痛みを体験した被災地の方々はもちろんのこと、東京の舞台芸術家たちにおいても、あるいは客席においても、この地震による影響は大きかったのではないだろうか。だが、それがもたらした変化がどんなものであり、何を意味しているかについては慎重に吟味されなければならず、よっつこのことに関しては今、いい判断を下すことをしなす。私は単に「震災後」という場所に立っていることを確認した上で、この戯曲を執筆して行くことにする。

震災後の地点から戯曲を書くといっても、この地震によって産まれた政治的・社会的対立を扱うという意味ではない。具体的に言えば、原子力行政にまつわる今後の展開や、震災復興のために真に必要な行政的な枠組みについての議論はこの戯曲からは徹底的に排除する。少なくとも私にとって芝居という表現形式は、そういった種類の議論を交わす場ではありえないからだ。

もちろん政治的に考えてみたいことも沢山ある。震災直後にも関わらず混乱らしい混乱を起こさなかった私たち日本人の国民性であるとか、そういう「伝統」にこの際注目してみることも決して無益でないだろう。

あるいは自国民からさえも徹底的に批判され、停滞し続けている行政のあり方に関して考えてみるのもよいだろう。常に批判の矛先に立たされる政治家や官僚という人々がある面で私たちの代表であることは明白であり、この問題解決能力の低さは人ごとではありえないからだ。

いったいどうして、私たちは効率よく日本人の力を結集することができなかったのだろうか？ どうしてももっとうまくこの国を運用していけなかったのだろうか？ こういった問いについては今後とも十分に考える必要がある。現政権が日本という政治的・文化的枠組みの中で震災復興という現実に向かっていたことは事実であり、日本という国家、あるいは文化の持っている何らかの欠陥・限界が、震災に対して全く無力な中央政府という結果を産んだことはしっかりと記憶されなければならないからだ。

余談が過ぎた。今はこの戯曲について話そう。

私は今、私が書けるものについてだけを書こうと思う。私はこの地震に対して当事者ではなかった。なにせ私は震災を韓国で体験している。東北・関東の人々が余震の恐怖と戦っていた3月4月の間、私はずっとソウルという場所で一度の余震も味わわずに過ごした。

そのことは私自身にとって大変奇妙な体験だった。そうして私が、世界と自分との間に感じてきた隔たりのようなものをより強く「実感」するには十分な体験であった。事件はいつも私がいる場所以外のところで起こる。事件が現場で起こるものだとするれば、私はいつまでたってもその現場には辿りつけない。そういうまぬけな刑事の役割を負っているのが私であり、私のいないところにだけ「現場」というものが出現する……。そんな被害妄想的な気分をさえ私は味わった。

冷静に考えれば、震災当時を私が海外で過ごすことになったのは単なる偶然である。そこに「意味」を見出すことに論理的必然性はない。だが、それが私の心理的眞実であることもまた事実ではある。したがって、今現在も私にとって震災は手の届かない何かであり、隔靴搔痒、実感のわからない何かであり続けている。だが、東京の人間にとってこの感覚はそんなに珍しいものでも異常なものでもないだろう。「このたまらない程のもどかしさ。これならば今の私にも表現できるかもしれない。そのことをもって、この戯曲の玉糸点へした。」(1630文字)

音響・照明の効果は最小限に控える。

身体に関してはあくまでも不動の動を見せるのであって、ムーブメントを見せるわけではない。

本の形式に関しては台本の紙をそれぞれが持っている稽古場の状態でもいいのかもしれない。極力、本番用に整えられたのではない状態を準備する必要があるのではないだろうか？ 家でこの普段着、とか。



圭介 ダイアログ、スカイプ、安否確認は同窓会のように。ミヤコと内藤の会話。

何人かの俳優が椅子に座っている。それぞれ台本を手にしている。  
開演の時間が来ると俳優たちはそれを読み始める。

ミヤコ あ、もしもし？ ナイトウ君？ あたしあたし、ミヤコです。て、え、見えてる？

内藤 いや、見えてないですけど。てか、重くなるんで映像つけてないんですよ。

ミヤコ あ、そう。あ、そういうもの？

内藤 まあ。ていうか、マジ久しぶりっすね（笑）

ミヤコ ね。久しぶり（笑）

内藤 うあー、元気にしてんすか？

ミヤコ 元気元気。てか、ナイトウ君は元気にやってんの？

内藤 まあ、はい。怪我とかはしてないですけど。

ミヤコ よかったね。あ、なんかごめん、わざわざ電話もらっちゃって。て、これ電話なの？ スカイプって電話？

内藤 まあ、大丈夫ですよタダなんです。

ミヤコ あ、そう？ へー、そうなんだ。

内藤 なんかこっちこそすみません、わざわざアカウント作ってもらっちゃって……。

ミヤコ まあ、あんまよく分かんなかったら友達（彼氏）にしてもらって、

内藤 ああ、そうすか。

ミヤコ うん。え、今、内藤くん、どこにいるの？

内藤 韓国。

ミヤコ カンコク？ て、え、カンコクって韓国？

内藤 そうですそうです。いや、韓国は韓国じゃないですかそんな。今、ちょっとソウル来てます、  
っ、

ミヤコ ええー、なんでなんで？ てかだから携帯つながりなかつたのか。て、え、なにやってんの韓国って？

内藤 や、まあ、いろいろなんか仕事したり、あのほら、自分ちよって親戚がこっちにいますんで、

ミヤコ ああ。

内藤 まあ、観光とかもしてるんですけど、

ミヤコ えー、そうなんだ、え、え、いつからそっちにいるの？

内藤 半月前くらい……。

ミヤコ あ、そうなんだ。え、じゃあれだ、地震の時は全然もつ、

内藤 そうなんですよ。もう地震ん時はこっちだったんで、全然なんか蚊帳の外って感じで、

ミヤコ わあ、なんかじゃあ、よかったかもね、それはそれで。安全ていうか、ね、

内藤 ま・ある意味そうですね。

ミヤコ え・じゃなに地震のニュースとか全然あれ？ わかんないっていうか、

内藤 や、でも一応ネットはつながってますし、なるべく情報は入るようにしてるんで……。

ミヤコ そっかそっか。

内藤 ていうかミヤコさん大丈夫なんですか、家族とかそういう……、

ミヤコ うん。あたしは全然、大丈夫なんだけど。

内藤 はい……。

ミヤコ あ、でもびっくりした。そっか海外か。そういう場合もあるか。

内藤 なんかあったんですか、急に（連絡してきたりして）？

ミヤコ ああ、いや、別にびびっていついっつもないんだけど、いや地震とかもあったし、大変で

すねみたいなの、内藤くんどうしてんのかな、っていうのもあったし、

内藤 はあ……（そんな程度のことでもわざわざ連絡してきたのかな？）

ミヤコ じゃあ、ゆーかあのみさ、内藤へんにちよっぴ聞きたいことがあって、どういあの、そういうの、  
なんだけびね、

内藤 はい

ミヤコ あの、今、カズヤさんとどうしてるかわかる？

内藤 や……、カズヤさん、はちよっこわかんないですけど……。

ミヤコ え、連絡をとってみようとかそういうことはした？

内藤 この地震のあとどうしていいかわからず悩む？

ミヤコ そうそう。取ってない？

内藤 いや、取ってないですね。ていうか俺もう、カズヤさんと何年も連絡とかとってないんで、

ミヤコ そうなんだ。

内藤 はい。え、ミヤコさんはまだなんか、続いているんですか？

ミヤコ や、全然続いてはないんだけど別に。

内藤 ですよ。

ミヤコ あ、いや、別れてるよ全然、そういう意味では、

内藤 なんか俺もそう聞いてから、

ミヤコ うっそ、え、誰に聞いたの？

内藤 え、別にやっちゃんとか……、

ミヤコ あー、やっちゃんね。てか、元気にしてんのかな、やっちゃん。

内藤 あいつは、はい。相変わらずっすよ。こないだも二人で焼肉食い行って

ミヤコ へー、そうなんだそうなんだ。

内藤 すごええ太ってますよあいつ。

ミヤコ えー、へへへへへへへへ。

内藤 もう、ブクブクっす。

ミヤコ て、えーと、なんだっけあの、だからそう、あたしも別にカズヤさんと連絡とかとって  
たわけじゃないんだけど、なんかでもカズヤさん宮城じゃん、とか思って。



三ヤコ いや、あたしがいつもマテラッシュィやらされてたから、  
内藤 頭突きされるだけですよね？

三ヤコ そうなんだよ、ひどくないあの人、て、違う。サッカーの話はいいんだよ別に。  
内藤 はいはい。

三ヤコ じゃなくてだからそうだ、カズヤさんが実家帰ってるんだっつらこの、今回の地震とか、  
結構なんかあったのかなア、とか思って、

内藤 ぶじでしたっけ、宮城の？

三ヤコ いや、わかんない。わかんないの内藤くん？

内藤 いや、んー、仙台ではない、みたいなと言ってたような気がしますんですけど……なんか、  
んー……え、カズヤさん電話は変えてないんですけどよね、あのドコからっ。

三ヤコ 多分ね。

内藤 なんすか多分して。

三ヤコ 一応、電話するどプルルルってはなるんだけど、

内藤 出ないんですか？

三ヤコ 出ない。出ないし……、あーでも内藤くんとかが連絡したら出るのかも。

内藤 え？

三ヤコ や、なんかあたしだから出ないだけかとかも思って、

内藤 それはないんじゃないですか、

三ヤコ と思っただけだね、あたしも。でも、なんかメアドは変えたっばいからメールは返って  
きちゃうしいいっつか、新しいメアド知らねーし、教えてくわてねーし、みたいなこともあって、

内藤 はいはい。

三ヤコ そう、だからあれだよ多分、なんかほら、携帯のさ、会社を変えても番号は変わりません  
みたいなあの……番号……あんじゃんなか、番号なんかかっティみたいな、

内藤 適当っすね。や、わかりますけど、あれですよねあの、番号なんかかっティ

三ヤコ 番号マテラッシュィ、

内藤 違いますよ絶対。じゃああの、わかりましたよ。そしたら俺の方でもなんか、やっちゃん  
とかにもいろいろ聞いてみたりして、連絡とってみますよ。

三ヤコ やっちゃんならわかるかな？

内藤 聞いてみますよ。

三ヤコ あー、なんか、よかった内藤くんに連絡して。ありがとうほんと。

内藤 でもあの、ななっつか、

三ヤコ さ、なに？

内藤 連絡しただけじゃないんですか？

三ヤコ じゃあ、何が？

内藤 や、それでカズヤさんと連絡しただけって、ななっつか……、あー、ま・別じゃあ  
とかないっすよね、それね。

三ヤコ うん。別にじゃあなごらな。

内藤 はい。

ミヤコ うん。え、なんかしないダメ？

内藤 てわけじゃないですけど。あ、全然ダメじゃないです。すみません。

ミヤコ なんかあれ、単なる自己満だろって？

内藤 いや、そんなこと言っちゃダメですよ、別に。

ミヤコ そりゃ別にねエ、カズヤさんになんかあったとして？　じゃ、なんか助けが必要な感じだったとしてどうするかっていったら別になんにも考えてないし、何それ、とかは自分でも思っているじゃない……

内藤 や、それはミヤコさんとカズヤさんの話だと思っただけ、ちょっとわかんないんですけど。

ミヤコ わかんないよ、あたしだって。でもなんか、え、そりゃ別に今は全然、付き合っているとかでもないし、なんか別にあたしも自衛隊とかじゃないしね、

内藤 ん？　自衛隊？

ミヤコ いや、何も力にはなれないとは思っけど、別にそういう道路とか作れないし、

内藤 それは作らなくて大丈夫だと思いますけど、

ミヤコ あたしは別に何もできないけどさ、だからってカズヤ君が今どうしているとかそういうのが心配っていうのはそれは別に本当じゃん、だって心配なんだから実際、

内藤 すみませんなんか。

ミヤコ え、なんで謝るの？　別にそんな、謝るようなことじゃないと思うけど、

内藤 そうですよねあのオ……、なんていうか、まだ分かんないじゃないですか何も。

ミヤコ ……はあ？

内藤 そんな全然、何もないかもしれないです。全然ね、大丈夫かもしれないわけですよ、そんなな。

ミヤコ ……。

内藤 あー、とりあえずまあ、連絡取ってみますわ。

ミヤコ うん。

内藤 まだなんかわかったら、す……ミヤコさんにも連絡入れますから、

ミヤコ うん。ありがとね。ホント。

内藤 いやいや、じゃああの、はい。また。

ミヤコ またねー。

## モノログ 内藤

内藤 そのあとすべにやっちゃんにメールをしてみたんだけど、やっぴりというか、やっちゃんも全然カズヤさんのことは何もわかってなくて、ま・そつだよな、とも思ったんだけど、俺が韓国にいるっていうこともあいつはわかってたから、やっちゃんの方が俄然やる気になってくれて、当時の店長なんかも連絡をとってくれるっていう話になった。ずっと前に別れたはずの「ミヤコ」さんがちゃんとしたカズヤさんのことを心配してる、みたいな話がやっちゃん的には「ヒットしたらしいへへ」「ヤッパそついうつながらりって貴重」みたいなことになって、あれこれ骨を折ってくれるようになった。やっちゃんは今、一人で海外旅行に行ったりするのが趣味なんだけど、そ

『まだ、わかんないの。』





内藤 あ、もしもし？ 内藤ですけど、ミヤコさん？ あの今、ちょっと大丈夫ですか？ て、聞かせてますか、おーじ？

ミヤコ あーはいはい、ごめん大丈夫、聞かせてます。

内藤 あー、カズヤさんのことなんですけどあの、

ミヤコ うんうん

内藤 店長とかにいろいろやっちゃさんが聞いちゃって、あの、一応なんていうか実家にも連絡がついたみたいなんですけど、あの、カズヤさんなんか、もう何年前に結婚したそうなんです、あの、俺も全然、なんの連絡ももらってなかったんですけど、なんか地元、のほうで相手見つけたらいい、そこでなんかおみやげとかも送るようなんですけど、あ、なんか、大丈夫ですかミヤコおま？

ミヤコ 大丈夫大丈夫、それじゃ？

内藤 であの、ちょっとまだよくわからないみたさ。母もいろいろか、そのいろいろはよくわかんないみたさ、

ミヤコ ……。

内藤 いろいろかまあ、結論から言いたいあの、俺がわかったことはそれで全部なんですけど、その、何もまだわからないさ、いろいろいろいろ、いろいろいろいろ、

間。

ミヤコ 帰ってきくな、おんじい。

内藤 はい。

間。

内藤 まだ、わかんないさうなまああの、

ミヤコ うん、わかった。ありがとう。

内藤 はい。

間。

ミヤコ あのね、

内藤 はい……。

ミヤコ 内藤くんに言ってもなんか、よく分かんない話なのかもしれないんだけど、

内藤 はい。

ミヤコ あの、いろいろかあ、結婚とかをすすめて、今、付き合っている人かもしんないさ、まあ、まだ全然、会ったことも無い人かもしんないんだけど、

内藤 はい。

ミヤロ 別に結婚とかじゃなかったとしてもいいか。でもなんか、きっとあたしがこれから好きになる人っていうのは全員、カズヤさんに似ているところがある。と思う。だからなんだっていう、あれじゃないんだけど、さ。

内藤 ……はい。

幕